



統計から社会の実情を読み取る

第70回 日本人は創造性、挑戦心のない国民か

本川 裕 | Honkawa Yutaka
アルファ社会科学株主席研究员

■東京大学農学部農業経済学科卒。財団民経研究協会常務理事研究部長を経て、現職。元立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、ネット上で「社会実情データ図録」サイト (<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>) を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著作は、「統計データはおもしろい!」(技術評論社、2010年)、『統計データが語る日本人の大きな誤解』(日本経済新聞出版社、2013年)等。ダイヤモンド社のダイヤモンド・オンラインにWebコラム「本川裕の社会実情データ・エッセイ」を連載中(隔週)。



「創造性」や「挑戦」への自負心が弱い日本人

世界価値観調査は、世界数十か国の大学・研究機関の研究グループが参加し、共通の調査票で各国国民の意識を調べている国際調査であり、国民性の比較に関する極めて貴重なデータを提供している。調査は、1981年から、また1990年からは5年ごとの周回で行われており、結果が公表されている最新の6回目調査は2010～2014年に実施された2010年期(wave6)の調査である。

今回は、この調査の結果を使って、日本人の国民性がいかに世界各国と異なっているか、そして日本人の考え方がどれだけ誤解を招きやすいかを明らかにしたい。

世界価値観調査では、日常生活を導いている10個の基本価値を体系づけたシュワルツ(Schwartz)の価値理論にそった設問を設けている。そのうち、「創造性」と「挑戦」の価値について、それぞれを大切にしているかを聞いた2設問の回答結果を散布図にあらわした

(図1参照)。

図1を見れば、あなたは「創造性」や「挑戦」を大切にしているかと問われたときに、自信をもって「はい」と答える人間の割合は、日本人の場合、世界一少ないことが分かる。

「創造性」、すなわち「新しいアイデアを考えつき、創造的であること、自分のやり方で行うことが大切な人」に自分が当てはまる回答した割合の上位3位は、ナイジェリア、ガーナ、キプロスであり、下位3位は、日本、モロッコ、オランダである。米国人も60か国中44位と低い方である。

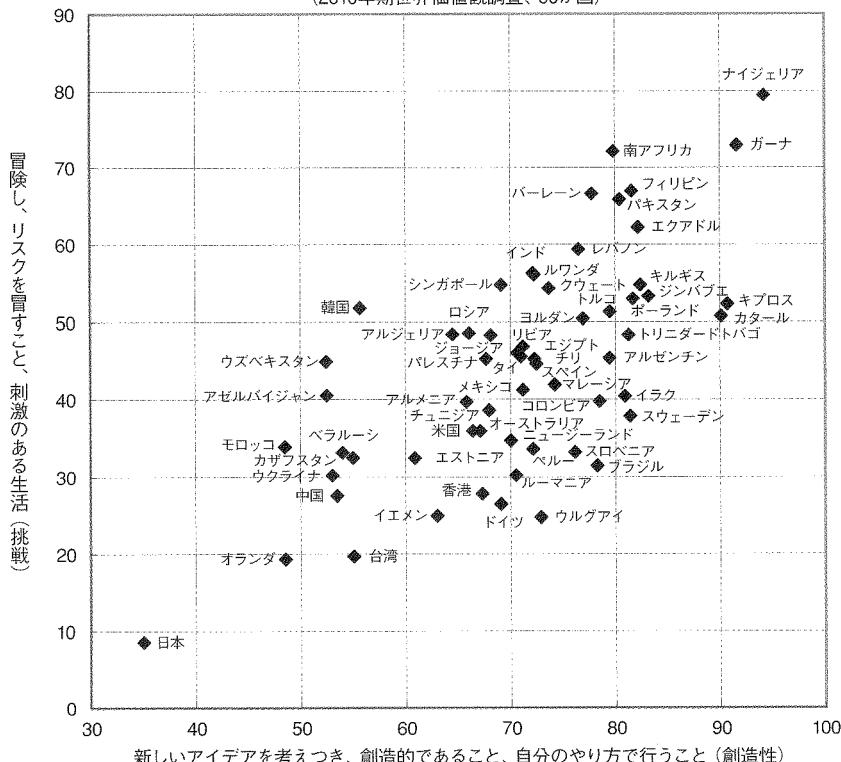
しかし、この結果から、上位3位の国民が「創造性」の価値観を強く抱いており、下位3位の国民や米国人にはそうした価値観が薄いと考えるのは、いかにも無理がある。むしろ、上位の国民はそうした価値に沿って行動しているという自負心が高く、逆に、下位の国民は、そういう自負心が弱い、あるいは、自己評価が厳しいと考えた方が妥当である。下位の国は評価基準が厳しいので自分はとてもその域に達していない

図1 「創造性」や「挑戦」を大切にしているという自負心が弱い日本人

「あなたは次のようなことを大切にしている人としてどの程度当てはまりますか?」に

「当てはまる」と回答した人の割合(%)

(2010年期世界価値観調査、60か国)



注) 「1 非常によく当てはまる」、「2 当てはまる」、「3まあ当てはまる」、「4 少し当てはまる」、「5 当てはまらない」、「6 全く当てはまらない」、「9 わからない」のうち1~3の回答の計の割合(無回答を含む総数に占める)

資料) 世界価値観調査 HP (2016.3.23)

いと判断する人が多いのであろう。ある意味では、そうした価値観を強くもっているのは下位の国民なのである。

日本ばかりでなく、中国、台湾、韓国、香港といったその他の東アジア諸国も、「創造性」の自己評価が、それぞれ、60か国中、54位、51位、50位、42位と低くなっている。儒教の伝統が強いこれらの国では、西欧先進国や東アジア以外の途上国の国民と比較して、自己評価が厳しくなる傾向があるといえよう。

「創造性」と「挑戦」の各国分布は、ほぼ比例しており、「挑戦」についても「創造性」と同様なことが当てはまる。

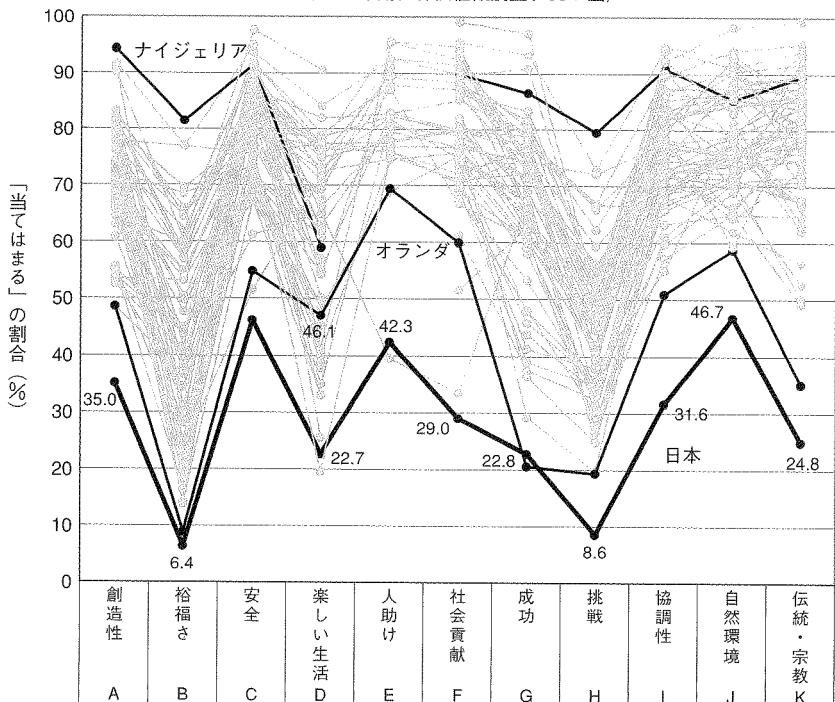
何事についても自負心が弱く、自己評価が厳しい日本人

しかし、自己評価の厳しさという側面を考慮に入れたとしても、それだけでは、日本人や東アジアの国民が創造性や挑戦に対して、余り重きをおいていないのではないか、という疑いを晴らすことはできない。そこで、回答結果の意味をはっきりさせるために、10個の基本価値の全部についての回答の各国分布を見てみよう。

図2に示した10個の基本価値をあらわす11個の価値（「人助け」と「社会貢献」は同じ基本価値を二つの表現であらわしている）について

図2 何を大切にしているかについての自負心の国際比較

あなたは次のようなことを大切にしている人としてどの程度当てはまりますか?
(2010年期世界価値観調査、60か国)



注)「当てはまる」の割合については図1と同じ。基本的には60か国比較であるが、E、Fはそれぞれ28か国、58か国の比較である。それぞれの価値の設問文については以下を参照。価値をあらわす言葉は、シュワルツの基本価値についての一般的な用語ではなく、実際の設問文にあわせた表現を用いている。

	価値	設問
A	創造性	新しいアイデアを考えつき、創造的であること、自分のやり方で行うこと
B	裕福さ	裕福で、お金と高価な品物をたくさん持つこと
C	安全	安全な環境に住むこと、危険なことはすべて避けること
D	楽しい生活	楽しい時間をすごすこと、自分を「甘やかす」こと
E	人助け	周囲の人を助けて、幸せにすること
F	社会貢献	社会の利益のために何かするということ
G	成功	大いに成功すること、成し遂げたことを人に認められること
H	挑戦	冒険し、リスクを冒すこと、刺激のある生活
I	協調性	常に礼儀正しくふるまうこと、間違っていると言われそうな行動を一切避けること
J	自然環境	環境に気をつかったり資源を守ること、自然へ配慮すること
K	伝統・宗教	伝統や宗教や家族によって受け継がれてきた習慣に従うこと

資料) 世界価値観調査 HP (2016.3.23)

ての各国分布では、「創造性」や「挑戦」といった、日本人が不得意だとしても疑問を抱かれないような価値ばかりでなく、「安全」、「協調性」といった日本人が得意としていると考えられている価値についても、大切にしているかと聞か

れて「当てはまる」としている人の割合は世界一低くなっている。

つまり、日本人は、実は何事にもよらず自負心が薄弱であり、見方を変えれば自己評価が厳しいのである。

日本人と最も良く似たパターンはオランダ人の回答である。オランダ人の順位は日本に次ぐ2番目の低さを示しているのが5項目、日本を上回る最下位が1項目となっているのである。ドイツなども、実は、日本、オランダと類似している。

自負心の弱さではなく、逆に、自負心が強いことで目立っているのは、ナイジェリア、ガーナなどのアフリカ諸国、あるいはカタールなどの中東諸国、ブラジルなどのラテンアメリカ諸国である。概して先進国より途上国の国民の方が自負心が強いといえる。

自負心の強さという点で私が連想するのは、カエサルの先駆けとも言える古代ローマの独裁者スラが自ら撰んだとされる次のような墓銘碑である（岩波文庫版・河野与一訳『プルターク英雄伝（六）』p.210）。

“自分に善を施した友人も自分に悪を加えた敵も自分の方からした行いには及ばない”

若い頃にこれを読んだとき、意表をつくセリフにビックリし、何だかんだ言っても、儒教やキリスト教などの影響を知らず知らずに受けて

いる現代人にはとても吐けないセリフだと感じたことを思い出す。途上国には今でもこんな精神で生きている者が、結構、多いのであろう。日本人でも戦国時代のかぶき者の武将なら同じようなことを言ったかも知れないが、現代日本人はそんな世界から最も遠くにいるのである。

日本人の国民性の特徴は自然環境重視

このように、世界価値観調査のこの設問の結果は、それぞれの価値の重視度の値について各国比較すると各国国民の自負心の程度を捉えることができるが、それは、想定されている本来の使い方ではない。むしろ、国民がどの価値を他の価値より重視しているかについて、各国の違いを比較するのが正しい使用法だと考えられる。

表1には、それぞれの価値を大切にする人の割合の最も高い国数と該当国を掲げた。最重視する国が最も多い価値は「安全」の20か国であり、アジア諸国やイラクなどの紛争国が並んでいる。安全に暮らしたいという人々の願いがあらわれているのだろうか。

次に最重視する国が多い価値は「伝統・宗教」であり、ロシアなど旧ソ連圏とパキスタン、ト

表1 それぞれの価値を最も大切にする国数と該当国

価値	最も割合の高い国数	該当国
A 創造性	7	ドイツ、スウェーデン、アルゼンチンなど
B 裕福さ	0	なし（ほとんどの国で最下位かそれに次ぐ価値）
C 安全	20	香港、台湾、フィリピン、タイ、オーストラリア、イラク、ルワンダなど
D 楽しい生活	0	なし
F 社会貢献	11	米国、オランダ、中国、インド、ブラジルなど
G 成功	0	なし
H 挑戦	0	なし（ほとんどの国で最下位かそれに次ぐ価値）
I 協調性	4	韓国、カザフスタン、エストニアなど
J 自然環境	4	日本、コロンビア、ルーマニア、スロベニア
K 伝統・宗教	14	ロシア、ウクライナ、パキスタン、トルコ、エジプト、カタール、マレーシアなど

注)「E 人助け」は対象国が少ないので項目間の順位づけから除外

ルコなどイスラム諸国が並んでいる。

「社会貢献」を最重要視する国には、米国、中国、インド、ブラジルなど人口大国が並んでいる。これらの人団大団が「社会貢献」を重視しているので世界全体でも「社会貢献」がトップにあがるであろう。いわば、これが世界標準である。

日本の場合は、「自然環境」を最重視している点が特徴であり、共通の特徴をもつ国を見ても少し特殊なグループとなっている。自然とともに生きるという考え方が日本人の目立った価値観といえよう。日本人が2番目に重視しているのは「安全」であり、中国以外のアジア諸国と共通する特性である。「人助け」を除き（表1の注）を参照）、3番目に重視しているのは「創造性」であり、これは、ドイツやスウェーデンなどと似ている。

最後に

今回取り上げた意識調査結果にあらわされているように、日本人の自負心の低さ、あるいは自己評価の厳しさが、海外から日本人が「奇妙」と思われる原因のひとつになっていると考えられる。余りに控えめに発言するものだから、真に受けると、実は、実力を隠蔽していたということが多く、だまされたと感じる外国人も多いのではないのだろうか。しかし、意図的にそうしている場合は、そう多くないと考えられる。控え目に自己評価するのが日本人の習い性となっているのである。

日本では、「世界一“チャレンジしない”日本の20代」というネット記事が、「創造性」と「挑戦」の散布図（図1）について20代のみ抜き出したものを証拠として、一年以上前に報じられたことがある。それは二重にミスリーディングだった。

まず、20代がそれより上の世代と比べてチャレンジしないとされている点がおかしい。創造的でなく、またチャレンジしない点を指摘するしたら、それは、日本人全体なのである。「創造性」を大切にするかどうかについて、日本の29歳以下の「当てはまる」の割合を見てみると45.9%であり、国民全体の35.0%に対して1.31倍となっている。45.9%という割合は全体と同じく世界最低であるが、若者の対全体倍率は、むしろ、韓国に次いで、世界第2位の高さなのである。日本人全体の自負心の弱さ、あるいは控え目さの中で若者は、むしろ、相対的に積極的なのである。

次に、値が、直接、あらわしているのは“創造的でない”ことではなく、“創造的であると思っていない”ことだけである点を見逃している。日本人は、自負心が弱い、あるいは自己評価が厳しく、控え目なだけなのだ。自分を控え目にしか主張しないという日本人の回答特性を無視し、世界価値観調査やその他の国際意識調査の結果から「能力も覇気もない日本人」を示すようなデータを取り出し、無闇に警鐘を打ち鳴らすという調査結果の誤用が多い。自戒を込めて、本稿を作成したゆえんである。